

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 31

学校名・団体名	新潟市立新潟小学校
HPアドレス	http://www.niigata.city-niigata.ed.jp/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	「地域の学校」から「地域が学校」へ
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>環境・社会問題の多様化、複雑化が進む中、未来の社会の担い手となり、様々な問題の解決にあたっていくのは、間違いなく今学校で学んでいる子どもたちである。こうした中、学校は未来を生きる子どもに、社会の担い手としての生き方をしっかりと教えることが必要であり、どのような困難に直面しても生き抜く力を身に付けさせなければならない。そのためには、学校がこれまで以上に地域に開かれ、地域とともに歩むことが必要である。平成28年1月には、文部科学省から「次世代の学校・地域」創生プランが提言されたことは記憶に新しい。そこで、全国に先駆けて新潟市内各小中学校に配置されている「地域教育コーディネーター」と学校担当者が連絡・調整し、学校という箱の中だけにとどまらない教育活動を創出する。学校と地域の垣根を取り払ったダイナミックな教育活動の展開は、社会に開かれた教育課程を実現し、「地域の学校」から「地域が学校」へと意識改革を促し、新たな学校・地域の姿を見出せると考えた。</p>	

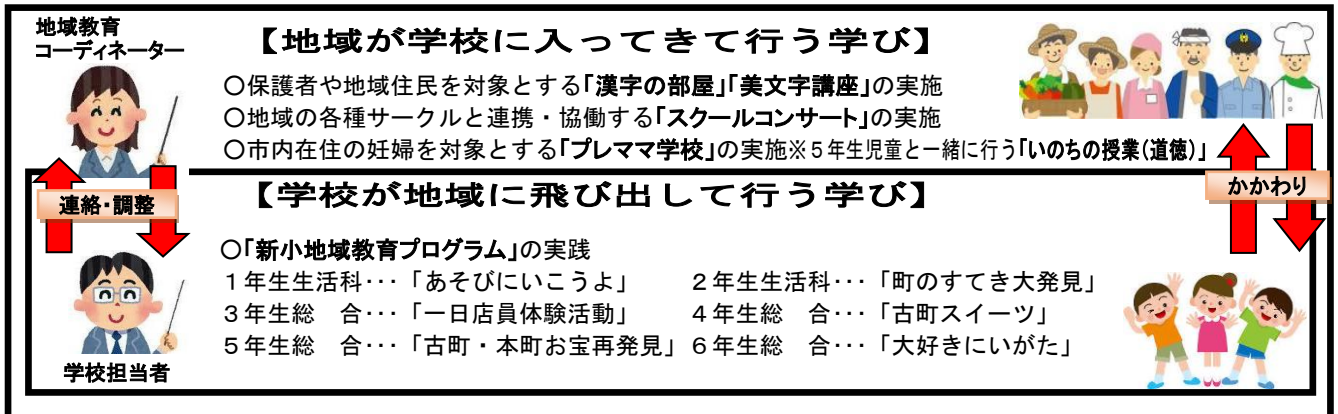
【活動内容】

学校と地域の垣根を取り払ったダイナミックな教育活動の展開は, 社会に開かれた教育課程を実現し, 「地域の学校」から「地域が学校」へと意識改革を促し, 新たな学校・地域の姿を見出せると考えた。そこで, 全国に先駆けて新潟市内各小中学校に配置されている「地域教育コーディネーター」と学校担当者が連絡・調整しながら, 学校という箱の中だけにとどまらない教育活動を推進した。

1 「地域が学校に入ってきて行う学び」と「学校が地域に飛び出して行う学び」の二つの学び方向性(図1)

地域教育コーディネーターを中心に組織する「地域が学校に入ってきて行う学び」と, 学校担当者が中心になって組織する「学校が地域に飛び出して行う学び(新小地域教育プログラム)」の二つの方向性を両立させ, 保護者や地域住民, 子どもたちや学校職員の双方に「学校を含めた地域全体が学びのステージである」という意識を高めた。

図1 「地域が学校に入ってきて行う学び」と「学校が地域に飛び出して行う学び」



【活動の実際】

(1) 「地域が学校に入ってきて行う学び」※プレママ学校を抜粋

○プレママ学校

地区公民館と連携・協働し, 市内在住の妊婦を対象として「プレママ学校」を開催した。学校を会場に, 9月から全5回の講座を開講し, 妊婦同士の仲間作りを支援したり, 助産師を講師として出産までの見通しをもたせたりして出産への不安を和らげ, 命を育むすばらしさの共有を図っている。

第3回の講座では当校の5年生の子どもたちと一緒に「いのちの授業(道徳)」を行った。プレママからは「あらためていのちの大切さを考えさせられました。」「赤ちゃんに早く会いたいです。」などの感想が聞かれた。5年生の子どもたちからは, 「命がずっとつながっているんだと分かりました。」「自分の命も他の命も大事にしたいと思いました。」などの感想が聞かれ, 双方にとって価値ある学びになった。これは, 地域教育コーディネーターが地域と, 学校担当者が学年との連絡・調整を行い, ねらいを共有し, 取り組んだ成果である。



プレママ学校「いのちの授業」

この他にも, 地域の諸団体と連携・協働した様々な講座やイベントが学校を会場に開設され, 保護者や地域住民の学校に対する垣根は確実に低くなるとともに, 互いのつながりを広げ, 深めることができた。

(2) 「学校が地域に飛び出して行って行う学び」※4年生および5年生の取組を抜粋

○4年生「古町スイーツ2017 GOGOわれらが甘キャラ8(エイト)」

- ・6月…地元商店街組合の方や菓子職人の方から, これまでの経緯やスイーツ作りを通じた地域活性化への思いや願いをお聴きした。
- ・7月…これまでの学び(3年生「1日店員体験活動」など)から, 「自分たちにもできる地域活性化」を目指し, 地域の自慢をスイーツに表そうと課題を設定し, 子どもたち一人一人がデザイン案を考案した。
- ・8月~10月…デザイン案をもとに, 菓子職人と繰り返し会議を行った。会議では, 職人から厳しい意見も出されたが, 「地域を元気にしたい」「子どもたちの思いを形にしたい」と, 互いに折り合いをつけながら心を通わせる会議となった。
- ・10月末…子どもたちのデザインをもとに完成したスイーツの試食会を行った。子どもたちは, 自分たちがデザインしたスイーツを目の前にし, そして口にする。大きな喜びと感動に包まれる会となった。
- ・10月末~…試食会后, 子どもたちは「古町スイーツをもっと知ってもらうにはどうすればよいか」と新たな課題をもった。そして, まちに飛び出し街頭アンケートを行った結果を分析し, さらにPRのために甘キャラ(スイーツと地域の自慢を表したゆるキャラ)を考案した。
- ・11月…地域の商業施設の一角で, 甘キャラとともにスイーツ発表会お



甘キャラとともにスイーツをPR

よび販売応援を行った。

○5年生「古町・本町お宝再発見」

- ・6月・・・地域の宝を維持・復活させようと活動している方々からお話をお聴きました。
- ・7月・・・講師から指導を受けながら、地域の伝統野菜である「寄居かぶ」を学校園で実際に育てた。また、自分たちにもできる地域活性化として古町が発祥の地とされている「下駄総踊り」を覚え、地域の盆踊り大会で披露した。
- ・9月・・・有志の子どもたちが「にいがた総踊り祭」に参加し、地域活性化に貢献した。
- ・10月・・・学校園で栽培した「寄居かぶ」を展覧会で販売するとともに保護者や地域の方の「寄居かぶ」に対する意識調査を行った。
- ・2月・・・まちに飛び出し、地域の商業施設の一角で、夏に交流した胎内市立中条小学校の5年生の子どもたちとともに、互いの地域活性化について発表会を開催した。



寄居かぶを自分たちで栽培



「にいがた総踊り祭」に参加

上記のような「新小地域教育プログラム」の実践にあたり、学校担当者は単元計画の段階から学年と関わり、コーディネーターとともに地域の諸団体との渉外を行い、学習活動が円滑に行われるよう連絡・調整を行った。

子どもたちは地域活性化に尽力したり地域の宝を守ろうと奮闘したりしている方々の思いや願いに触れ、地域の自慢や宝をPRする活動を通して、自分たちもその担い手の一人であるという自覚を高めた。

2 学びと交流の拠点づくり

「地域が学校」という意識を、子どもたちや保護者・地域住民に醸成するために、地域の「ひと、もの・こと」が融合する仕組みとして、商店街にある空き店舗に「たんぼぼふれあい広場」を開設した。そこで、「たんぼぼふれあい広場」が子どもたちの学びの拠点や住民が気軽に集える場となるよう、次の①～③を大切に、活用を進めた。



地域の空き店舗を活用して開設した「たんぼぼふれあい広場」

- ①各学年の「地域に飛び出して行う学び」の学習拠点
- ②学びの過程や成果の表現拠点(掲示・展示・発表など)
- ③保護者、地域住民との交流拠点



【活動の実際】※③「保護者、地域住民との交流拠点」を抜粋

今年度5月から、地域の方を代表に、学校は事務局として「たんぼぼふれあい広場」を「地域の茶の間」として毎月2日間定期的に開放した。それに合わせ、学校の教育活動の成果を学校内に留めさせることなく、その月の子どもたちの学習の様子を展示し、子どもや保護者、地域住民に広く来場を呼び掛けた。

それまでまちに足を運ぶ機会の少なかった保護者や地域のお年寄りが「たんぼぼふれあい広場」を訪れ、地域住民同士の新たなつながりが生まれている。



3 成果と今後の展望

○全国学力・学習状況調査(質問紙)での表れ

今年度の全国学力・学習状況調査の質問紙では、「地域や社会で起こっている問題や出来事に関心があるか」や「少数意見を生かしたり折り合いをつけたりして意見をまとめているか」の項目で肯定的評価がともに全国比を20%近く上回った。これは、子どもたちがこれまでの間、「新小地域教育プログラム」を通して系統的・発展的に地域の人々とのかかわりの中で、深い学びをしてきたことによるものと考えられる。(図2)

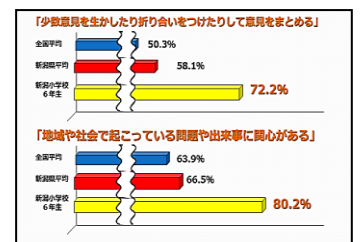


図2 H29全国学力・学習状況調査結果

○保護者・地域住民の意識の変容

新潟市で行っている「地域と学校パートナーシップ事業に関するアンケート」結果では、平成28年度と比較し、保護者や地域団体の方々は「住民同士の結びつきが高まった」と肯定的に捉えている。

(保護者H28:16.7%→H29:55.6% 地域団体H28:66.6%→H29:75.0%)

この変容はこれまでの継続的な地域との連携・協働活動や「ふれあい広場」での交流活動によるものと捉える。

○新たなつながりの創出

4年生「古町スイーツ」にかかわった菓子職人からは、「子どもたちの発想にはいつも驚かされる。これからの菓子作りの参考にしたい。」「子どもたちが地域のためにこれだけ頑張っている。私たちも頑張っていきたい。」「他の菓子職人からアイデアをもらってすてきなスイーツができた。」などの声が聞かれ、それまでかわりが希薄だった地域の菓子職人の間に、新たなつながりが創出された。

「新小地域教育プログラム」の内容構成や「ふれあい広場」の活用の仕方は、常に子ども、地域の姿を見つめ変革させていくべきものである。今後もさらに実践を積み重ねていきたい。